

情報という言葉の語源とその周辺について

今日情報として使用されている言葉の意味を広辞苑 (岩波書店) で調べると

初版 (1955 年 5 月 25 日)

じょうほう [情報] 事情のしらせ

第 2 版 (1969 年 5 月 16 日)

じょうほう [情報] (information) 或ることがらについてのしらせ

第 3 版 (1983 年 12 月 6 日)

じょうほう [情報] (information)

(1) 或ることがらについてのしらせ

(2) 判断を下したり行動を起したりするために必要な知識

第 4 版 (1991 年 11 月 5 日)

じょうほう [情報] (information)

(1) 或ることがらについてのしらせ

(2) 判断を下したり行動を起こしたりするために必要な知識

第 5 版 (1998 年 11 月 11 日)

じょうほう [情報] (information)

(1) あることがらについてのしらせ

(2) 判断を下したり行動を起こしたりするために必要な、種々の媒体を介しての知識

という変遷を経ている (注 : 丸付き数字は使用せず , 丸括弧付き数字とした) 。

つまり現在では information の和訳として情報という言葉が存在していることを示している。

また、中国語の中に“情報”という言葉が存在しているのか、またどのように使用されているのか“漢語外来詞詞典”(上海辞書出版社)で調べてみると、“情報”という言葉は日本語であって中国からの輸入語ではないとされている。中国では“情報理論”を“信息論”と訳し、“情報”という語も主に軍事関係で使用されている。したがって、“情報”の語源は日本なのである。

ところが“情報”という言葉の語源が確定されたと発表されたのは、1990年9月15日付け日本経済新聞・朝刊の文化欄においてであった。当時神戸大学教授であった小野厚夫氏(現・大手前大学教授)による調査結果によってである。ほぼ同時期、七尾短期大学の音成行勇氏も同様の調査をされている。

それまで、“情報”という言葉に関しては、1983年に日本医薬情報センター理事の長山泰介氏が“ドキュメンテーション研究”(第33巻431頁)において“情報という言葉の起源”を発表したことによる森鷗外造語説が一般に信じられていた。

それは森林太郎(鷗外)がドイツ滞在中、1888年に早川怡與造陸軍大尉に求められてクラウゼヴィッツの“戦争論”を訳しながら講じたことに始まる。帰国後、鷗外は第1編から第2編までを翻訳し、鷗外はそれを1901年に“戦論”として小倉第12師団司令部より印刷している。ここにおいてドイツ語の Nachricht の和訳を“情報”とし、情報を“情報とは、敵と敵國とに関する我智識の全體を謂う”と定義している。因みに、この2年後クラウゼヴィッツの戦争論は“戦論”とフランス語版の第3編以降を訳していた陸軍士官学校分との合冊で“大戦学理”(戦争教育社)として上梓されている。

このような事実と軍事色の強い用語であることから、長山氏が兵語と類推して1881年に陸軍省参謀本部が出版した“五國對照兵語字書”を調べ、その中に“情報”という言葉がなかったことから鷗外説を主張したためである。今でも“情報”の語源として、森鷗外説を記述している書籍を見かけるのはこのせいである。

しかしながら、小野厚夫氏も更に江戸末期にオランダの兵書を訳した1865年の大鳥圭介訳“官版 野戰要務”(陸軍所)、1872年からの“陸軍省日誌”(陸軍省)、陸軍の兵制がフランス式に統一されたことによって出版された1873年の高橋維則訳“佛國陣中軌典”(陸軍文庫)にあたり、1876年の陸軍少佐・酒井忠恕訳“佛國歩兵陣中要務實地演習軌典”(内外兵事新聞局)で初めて“情報”という言葉が現れることをつきとめたのである。このときの原語は *renseignement* と類推されている。

この頃までには、“情報”に近い言いまわしとして“敵情(状)の報知”と“敵情(状)の報告”が使われていたが、この言葉が短縮されて“情報”となったと思われる。これはその後しばらく“状報”という言葉とも併用されている。

最初に辞書に現れたのは“状報”のほうで、1887年の中江篤介校閲+野村泰享纂譯“佛和辭林”(佛學塾)の中で *renseignement* の項目にあるが、1897年以降は“情報”で統一されている。

ところで鷗外は“戦論”の中で“情報”と“状報”(一度しか現れない)を使い分けしており、鷗外研究者・大島進氏によれば、“情報”は敵情推測の能変(主体思量識)とし、“状報”は敵状推測の所変(客体印象識)と訳出分けしたものと解している。“データ”のように情報科学で扱う「形式的情報」を“状報”で表し、それに付加価値を考慮した“意味的情報”を“情報”で表すことができれば、二つの情報(状報)のもつ意味の区別がより明確になったことであろう。

いずれにしても、“情報”という言葉はその生まれた経緯から軍事に関係する場面で“諜報”と同様な意味を持たされ、戦後しばらくは戦時中の暗いイメージと同様に受取られ、一般人にはかなり抵抗感のある言葉であったようである。

したがって、戦後間もない1948年にクロード=シャノン(Claude Elwood Shannon: 1916/4/30-2001/2/24)が発表した“A Mathematical Theory of Communication”に始まるInformation Theoryが日本へ輸入され始めた時にも邦訳は避けられ“インフォメーション”とされていた。これに強引に“情報”という日本語をあてたのが関英男氏(1905-2001/12/16: 東京工業大学教授、電気通信大学教授、紫綬褒章受賞者)である。1954年のことであった。その後1950年代後半になると書物を介して学術語として広まっていった。しかし、この言葉は学界では不評であったようである。1960年に情報処理学会が創設された時、名前を決めるに際して、“情報”という言葉の不評もさることながら、“処理”という言葉も下水や汚物などの端末処理を連想するという理由で反対する人が多かったという。また、1962年に東京大学工学部に計数工学科が設置された時も - 今では信じられないが - “情報”工学科という名前が一笑にふされて、まったく相手にされなかったという。

<参考文献>

- [1] 長山泰介, 情報という言葉の起源, ドキュメンテーション研究, 第33巻, (1983), 431
- [2] 横田貢, 「情報」という語の成立をめぐって 鷗外初訳かとする見方への疑問, 情報研究, 第9号, 文教大学情報学部, (1988), 210
- [3] 音成行勇, 経営管理と情報の概念(1) 明治時代における形成過程の考察, 七尾論叢, 第2号, 七尾短期大学, (1989), 99
- [4] 大島進, 鷗外森林太郎による獨逸語 Nachrichten の二つの翻訳語「情報」と「状報」, 平成2年度前期全国大会講演, 情報処理学会, (1990)
- [5] 小野厚夫, 明治九年「情報」は産声 フランス兵書の翻訳に語源, 日本経済新聞(朝刊), 1990年9月15日
- [6] 小野厚夫, 「情報」という語の由来と変遷, 富士通ジャーナル, Vol.17, No.1, (1991), 75-78
- [7] 小野厚夫, 明治期における「情報」と「状報」, 神戸大学教養部紀要「論集」, 47巻, (1991), 81
- [8] 小野厚夫, 情報小論, 神戸大学国際文化学部紀要「国際文化学研究」創刊号, (1994), 1